

令和6年度 第1回八尾市芸術文化振興審議会

日 時	： 令和6年11月8日（金） 午後6時～午後8時10分
開催場所	： 八尾市商工会議所3階 多目的室
委 員	： 藤野（会長）、木ノ下（副会長）、大久保、緒方、高安、玉置、萩原、松井、葭仲 ※敬称略
事務局	： 杉島、古川、松村、川下（文化・スポーツ振興課）
八尾市文化振興事業団	： 北芝
傍 聴 者	： 0名

事務局より配付資料の確認。

資料1	八尾市芸術文化振興審議会規則
資料2-1	会議の公開に関する指針
資料2-2	八尾市情報公開条例（抜粋）
資料3	令和5年度 数値指標による定量評価
資料4	やおうえるかむコモンズ推進会議の進捗報告
資料5	事業視察アンケート
その他	高校合同文化祭、まちかどライブクリエイションチラシ 各会場チラシ
藤野会長追加資料	条例、計画の策定に向けた八尾市芸術文化振興審議会等記録 【文化庁】地方文化行政の機能強化に向けた調査研究報告書（抜粋）

1. 開 会

文化・スポーツ振興課 杉島次長よりあいさつ。

2. 新委員の委嘱

委員の変更があったため、新委員の玉置委員について、委嘱を行った。

3. 案 件

出席委員及び事務局の紹介。

これより、議事の進行を藤野会長に依頼する。

事務局より、会議の定足数の確認、会議の公開、傍聴について説明。

案件に入る前に、藤野会長より、「条例、計画の策定に向けた八尾市芸術文化振興審議会等記録」に基づき、令和2年度以降の本市における条例、計画の策定に向けた動きについて振り返っていただいた。また、「地方文化行政の機能強化に向けた調査研究報告書」に基づき、本市が文化庁の研究対象に選ばれ、調査報告書に掲載された旨を説明いただいた。

会 長

今日から新しく参加された委員もおられるし、前回の審議会から期間も空いているので、これまでの経緯について改めて説明したい。

今日のメインは、ほぼ1年に渡る活動内容についてだが、このメンバーの中で令和2年度

の八尾市芸術文化振興プラン推進市民会議から参加されているのは萩原委員と大久保委員の2人だけである。私がこの審議会をお引き受けしたのは令和2年度からであり、コロナで大変だった時期だ。その時までには推進市民会議という名前の会議体だった。そこで、市民アンケートの調査結果や、八尾市はかなり以前から芸術文化振興プランを作っていたが、その概要についての説明があった。

2回目は秋だったが、市内の資源調査について、ゼミ生も参加させていただき、とてもいい視察ができたと思っている。その後に市民会議を開き、市の芸術文化を取り巻く現状と課題について洗い出しを行った。

3回目の会議では、第2次八尾市芸術文化振興プランの総括書素案について検討するとともに、文化振興に関する条例についての頭出しを行った。条例を作るということはどういう意味があるのか、なぜ八尾市で条例を作り、それに基づいて新しい基本計画を作るのかといった趣旨説明をさせていただいた。第4回についても、条例づくりの助走のような会議を持った。

年度が改まり、市民会議から八尾市芸術文化振興審議会に名称が変わった。内容も、条例と基本計画の策定に照準を合わせるというような会議になった。その後は怒涛のような日々で、皆さん大変だったと思うが、例年、審議会は年に2回の開催だが、令和3年度は計5回の審議会を開催し、その間にワーキング部会を走らせており、ナンバリングしているのは7回だが、それ以外にもオンラインのワーキング部会や様々な打ち合わせに至るまで、毎週のように会議を行っていた状況だ。こういった議論を積み重ねて、私の経験からすると奇跡的なのだが、おおむね1年2か月で条例ができ、3か月後、令和4年6月に基本計画ができた。同時並行で二つの大きな仕組みが作られていた。こういう事例は私も経験がない。普通は条例を作るのに2年、それに基づく基本計画の策定に2年で、計4年かかる。このお披露目として、プリズムホールの改修に合わせて、令和4年7月30日に条例制定記念シンポジウムを開催した。その後については審議会しか資料には挙げていないが、推進会議を別途開催している。

私の感想としては、条例や計画を策定すると、記念シンポジウムで皆さんに披露して、おしまい(店じまい)のような形になり、あとは年に2回程度の審議会で進捗を確認している自治体が多いし、審議会すら作れていない自治体もあるので、紙だけの計画になってしまっている場合が多い。

今回、私たちは基礎、土台作りを急ピッチでやってきた。でも、その土台の上に推進会議が動いていて、この2年間、まちなかの色々なところでイベントが行われている。私はなかなか参加できないが、八尾市の場合は町工場と芸術文化振興が結びついている。高安委員のご活躍もあるが、工場は見方を変えたとすごい劇場だと、八尾の町工場はそのまま劇場になるということで、これはすごく素敵な例だと実感している。これだけ地域の文化資源が、一番遠く離れているようなのに、すごくマッチした展開ができたのは、全国的に見てもあまり例がないのではないかなと思う。皆さんのご苦勞に感謝したい。

そういったこともあり、文化庁が毎年、文化行政の調査研究を行っているのだが、令和5年度は地方文化行政の機能強化に向けた調査研究というのが行われ、この中で、中核都市よりも小さな基礎自治体を全国から10自治体ピックアップした。つまり、文化行政で先進的な取り組みをしている自治体の中に八尾市が選ばれ、八尾市にも文化庁から調査の方が来られ、それをまとめたものがこの資料である。

八尾には二つのエンジンがあるという話を私はよくするが、一つはプリズムホールであ

る。中身、運営、プログラムが素晴らしいことは全国的に知られている。ここにもう一つ加わったのが、やおうえるかむコモンズの推進体制だ。

この報告書ではこのようにまとめられている。「基本条例は『芸術文化による創造及び交流の基盤の形成』を目指して制定され、その有機的なネットワークを活かした豊かなまちづくりを目標として掲げ、それを受けて基本計画では、施策の第1に『芸術文化による創造及び交流の基盤の形成に係る体制と仕組みの整備』を掲げ、その推進主体を『やおうえるかむコモンズ』と名付けた。」

普通、基盤形成とはインフラ、箱物のことを言うのだが、そうではなく、ここでは仕組みとしてとらえている。それが推進主体である「やおうえるかむコモンズ」ということだ。

また、「計画の冒頭に持続可能な推進体制の整備、すなわち推進主体や推進手法のあり方を明記した例は他にあまりなく、きわめてユニークな計画であり取組と言える。」と、文化庁から評価されている。

ここのところは、皆さんに自負していただきたい。条例と基本計画で、審議会だけでなく、推進母体である推進会議を明記することをかなり意識的に行った。それがうまくいった、その土台の上に、まちかどライブクリエイションなどのそれぞれの取り組みがあるという建付けになっている。

長くなったが、4年間の振り返りをまとめ、ご説明した。この辺りを意識していただいて、今日の審議会での活動報告の評価に移りたい。

(1) 令和5年度 数値指標による定量評価について

資料3に基づき、北芝副館長から報告を行った。

北芝副館長

指標①文化会館の大ホール及び小ホールの稼働率については、残念ながら計画値を達成できなかった。令和5年度については、新型コロナウイルスはかなり収まってきたものの、冬にはインフルエンザが大流行し、市民活動に大きな影響を及ぼす要因が引き続き発生したことが一つの要因となり、大幅な稼働率アップには至らなかった。少しずつだが活動を再開される団体もあり、稼働率について回復の兆しはあるが、目標値の達成には至らなかった。今年度についても、稼働率の向上を図っている。少しずつではあるが、利用も増えてきたので、昨年度の数値よりは高い稼働率になるだろうと推測している。さらに今年度は、貸館関係の収益向上プロジェクトチームを発足し、活動している。

指標②文化会館指定管理者が実施する事業の入場者数については、計画値を6,825人上回って達成した。昨年度は、全76事業565回の開催となった。参加者は26,825人で、開催回数は昨年度を100回以上上回る形での実施となった。

この中で特色ある事業について一部ご紹介する。事業番号6はうえるかむコモンズにもつながる市民活動の場ということで、「プリズム・アート&シアター・プロジェクト 地域アーティストや市民の企画実現の場 プリズムホールであなたのアートを輝かせよう！」である。昨年度は34団体、計43回の開催ということで、館内の賑わいの創出とともに、市民の身近な場所での芸術鑑賞の機会の提供、さらには、市民の発表の場の提供に寄与できた。結果、134名の参画者、並びに来場者が5,113名おられたので、合計延べ人数として、5,247人の参加となった。

続いて、4ページ目「(5) 八尾の魅力の発信」である。こちらは指標④八尾らしさや魅

力を活かした事業の数にもカウントされる事業だ。事業番号 40「リズム@プリズム×まちで魅了する舞台シリーズ『夢幻の舞 望郷のうた』」というダンスの公演についてであるが、こちらはプロの出演者のほか、八尾児童合唱団や公募市民の出演者 26 名が参加し、事前稽古 9 回、公演 2 回を実施した。この公演にはほかにも、アライブペインティングで舞台の背景を素晴らしい映像で彩っていただいた中山晃子さんにご協力いただいたほか、たんすのこやしというイベントを実施した。これは、ご自宅にあるたんすのこやしを持ってきてくださいと募集し、集まった古着を衣装に作り替えるもので、衣装を作るお針子ボランティアも募集するなど、多くの方々に関わっていただくイベントになった。衣装に使わなかった古着についても、たんすのこやし展として、プリズムホールで展示し、持ち帰り OK にした。この企画に注目が集まり、NHK の夕方の情報番組に取り上げられた。

そのほか、八尾らしさのあるイベントについては、事業番号 41 の「まちで魅了する舞台シリーズ」や事業番号 42「高安薪能」並びに事業番号 44「プリズムサマーワークショップ 能の世界に飛び込んでみよう!」、事業番号 46「音とからだであそぶ なつのおとうた・わらべうた」これは八尾に伝わるわらべ歌で子どもと遊びましょうというワークショップであるが、こういった事業を実施しており、7 ページにはその時の様子を写真資料として掲載している。

指標に戻るが、指標④八尾らしさや魅力を活かした事業の数について、高校合同文化祭やまちかどライブクリエイション等、市のコモンズ主催で実施されている事業も含め 17 本となり、計画値を達成し、さらに昨年度よりも本数を増やして実施することができた。指標⑤中学生以下対象の芸術文化に関するイベント参加者数については、惜しくも 200 人程度、計画値には届かなかった。

これら合計 76 事業のうち 30 事業については、文化庁や大阪府の助成金、補助金の採択を受けており、市の指定管理料に上乗せする形で華やかに実施することができた。

会 長

指標の説明だけでなく、内容についても、的確、簡潔にご説明いただいた。私の印象としては多彩なプログラムだけでなく、手がかかるものを地道に、創意工夫を凝らしながら実施してくださっており、素晴らしいなと思う。

A 委員

事業番号 40 について、僕も事前のワークショップの方に参加させていただいたが、興味関心をもって参加したいと希望する人がとても少なく残念に感じた。これは八尾の特性なのかなと思う。体験するとか、経験するということになると、ちょっと大人しくなる。

「夢幻の舞 望郷のうた」の作品がどういう風になるのか気になったので、尋ねたら、振り付けされた北村成美さんが、八尾の町並みを見られて、いろんな人に話を伺って、関わり、それで作られた作品だという。八尾にある歴史やゆかりのある場所をつぶさに見られて、そのまなざしを持って作られている作品なので、いろんな情緒が含まれた形で制作されている。パラリンピック開会式のオープニングや様々な舞台やテレビに出演されている森田かずよさんが出演されることで、たくさんの刺激を与えてくれる、すごく素晴らしい作品が完成されたと思う。お稽古の当初よりもたくさんの人たちが熱い想いで関わり、作り上げられた作品を見ることで、見た人の中にも、こういう作品だったら私も出たいと思われる方が増えたら面白いと思う。

B 委員

プリズムホールは、元来、舞台芸術の世界ではすごい実績をお持ちで、専門的な方がめざ

すような舞台をやっておられる中で、あなたのアートを輝かせようという新たな取り組みをされて、市民の皆様方の芸術に参画できる機会を作られたことは非常にいいことだと思っている。何回か見に行かせていただいているが、今まで敷居が高かったホールでの展示や発表を、市民活動の皆様が発表できるというのは非常にいい機会を作られたと思う。募集のところで一緒に見させてもらっているが、毎回多くの方が応募されているのを見て、八尾の芸術文化基本条例に基づき、すそ野を広げる活動にも取り組んでおられて、非常に素晴らしいと思っている。

北芝副館長

一つの団体が2回コンサートをしていることもあり、43回の開催となっている。長い展示で2週間とさせていただいており、年間を通じて、大体何かやっているスケジュールで実施することができている。

条件として、八尾らしさ、八尾にゆかりのある、八尾が好きといったものがあれば、八尾在住、在勤でなくても応募できるようにしている。

昨年度ご報告した取り組みで、リニューアルオープンの時に、あなたのアートのプリズムホールを盛り上げようということで作品を募集した。その時に申込みいただいた主婦の方が会議室1で展示パネル4枚分くらいの作品を展示されたが、それを見られたその方の娘さんが、「お母さん、すごいね。こんなところで展示できるなんてすごいね。」と、ご本人以上に喜んでいて。これをきっかけに、娘さんもプリズムホールでの展示を夢みて、一生懸命絵を描くようになったみたいで、令和4年度後半の取り組みで展示していただいたのだが、その際は娘さんも一緒に作品を展示し、お母さんが書いた絵本を娘さんが読むという親子共演を果たしていただいた。実は、令和6年度の後半部分でも採択が決まっている。

現在は、うまく期間が埋まるくらいの応募をいただいております、条件に合わないような大きな音が出る催しや規格外の作品は断っているが、それ以外は審査で落とすことはない状況だ。これ以上に応募が増えてくれば、審査で選抜することが必要になるかもしれない。

C委員

私も仕事柄いろんな公のホールで出させていただくが、ホールに行ったら何かやっていることはそうそうなく、多様でバラエティに富んだプログラムを、通りがかったときにホールに入ったら、もしかしたら何かやっているかもしれない、というのは本当にすごいことだと思う。今お聞きしていて、誇れることだと思った。

私自身は声楽家だが、舞台に立てるようになるまでに、下積みではないが、本番の数というのはアーティスト全員にとって大切なことだ。これからの芸術家を育てる意味でも、見る人を育てていくという意味でも、本当に素晴らしい取り組みで、ありがたいと思う。

D委員

この事業に関しては主担当とサブ担当の2名で運営にあたっている。応募する人はみんながみんな、プロフェッショナルな方ではない。初めてやる人、やり方がわからない人が多い中で、担当スタッフが事前の打ち合わせから寄り添い、フルカスタマイズのように手間をかけて実施している。

A委員

経験のない人がチャレンジできる、階段を上れる機会があるというのはすごく大きい。スタッフさんの助言をいただきながら作り上げていくというのは、自分たちでもこうすればできるんだという貴重な経験になるのですごくいいと思う。

D委員

経費の面では、基本的には無料のスペースを利用していただくが、有料の部屋（展示室等）を使いたいということであれば、その分の利用料金を負担いただいている。また、作品展示に備品を使いたいということであれば、備品分の料金はかかってくる。基本となる机と椅子数脚はお金は発生しない。

E委員

オープンスペースや2階のうえるかむガーデンを拝見すると、受験生が受験勉強をしている。学生が勉強している横にアートがあるというのがすごくいいと思う。

D委員

勉強する場としてのPRを八尾市が行っており、勉強する人が増えてきた。そんな中で、あなたのアートを輝かせようの作品が隣にあるという状況が生まれた。勉強の合間に休憩しながらアートを楽しむことができる。

B委員

すごく敷居の高かった、格式の高いというイメージは継続して持ちつつ、すそ野を広げる活動をされていることはすごいことだ。

A委員

高安能について、視察という名目で拝見させていただいた。天候もよく、非常に素晴らしいものを見させていただいたと実感した。今回、非常にわかりやすい演目（仕舞「井筒（いづつ）」「弱法師（よろぼし）」、能「鐵輪（かなわ）」）が上演されていて、来場者が帰り際に作品や雰囲気について、熱心に話をされていた。

少年誌で「シテの花」という能楽師の漫画が連載をはじめた。能の知識がなくても十分に楽しめる要素が詰め込まれたとても興味深い作品。もっと身近な場所で能（や伝統文化・伝統芸能）に触れることが整えば、若い人たちも楽しめるので、面白いなと思う。八尾に残る文化財なので、もっと気楽な気持ちで見られる環境づくりが必要なのかなと思う。

（２）令和6年度 やおうえるかむコモンズ推進会議の進捗報告について

資料4に基づき、事務局から説明を行った。

会 長

去年と比べて今年の大きな動きとして、昨年度はイベントについて話し合うワークショップを開催してイベント実施に至ったが、今年はそうではなく、各会場のリーダーが主体的にイベント内容を決定していった。自生的というか、自ら生えてきた形の流れになってきているのかなと思う。それと同時に、やおうえるかむコモンズ推進会議がめざすまちの姿について、もっと話し合う機会を積極的に作る必要があると説明された。

つまり、ゆるくつながるほうがいいのか、自生したものをゆるくつなげて全体として見える化したほうがいいのか、それとも、ある目標に向けて目線を合わせて作っていくほうがいいのか、その辺のさじ加減は結構難しい。行政主導でやるとどうしても計画的にバシッとやりましょうということになるが、最終的にどういう文化の盛り上がり方がいいのか、その辺を一度皆さんで議論したほうが良い。

B委員

2028年が一つの目標になるので、2028年に向かってどう歩んでいくかというところだ。推進会議の副会長をさせてもらっている立場としてご報告すると、去年と今年で大きく推進のやり方を変えた。将来的には八尾市内各地で自発的に自走できるネットワークづくり

をするのが理想だ。一つの会だけですべてを仕切るというのは無理が出てくるだろうから、なるべくいろんな自走できる人たちに関わってもらって、一緒にゆるやかなネットワークづくりをしていくほうがいいのだろうと思う。ただし、その中には八尾市芸術文化基本条例があるので、条例に基づいて、ある程度のベクトルはそろえていきたい。ということを感じながら、どんな組織がいいのか考えて動いている最中だ。

来年以降はもう少しご意見をいただきながら、ベクトルをそろえていく必要があるということで、幹事会を再構築したいと考えている。今は会場のリーダーと幹事が合っていないのを、来年度はそろえていく。そして、幹事会の中で意見を戦わせることが必要だと思っている。また、推進会議も今は情報の共有化、報告会のような形になっているので、推進会議もグループワークをするなど、もう少し意見を出してもらいやすい会議体にしていかないといけないかなと思っている。どんな形がいいのか、藤野先生にもご相談させていただきながら、推進会議を再構築していきたいと思っている。

合わせて、2028 年が一つの目標ではあるが、その後をめざした組織づくりを考えている。今のメンバーでずっとやっていくわけではなく、新しいメンバーに入ってもらいなど、組織が活性化しながら成長していくことをめざした推進会議や、幹事会を構築していきたい。

A委員

今年はマルシェが結構多かった気がする。やおうえるかむコモンズが開催しているもの以外にも、商店街やいろんなところで月 1 回はやっている感じがある。そういったマルシェとの差別化。うえるかむコモンズで行っていることと、商店街で行っていることと、その他の場所、例えば農業をされている方々が行っているマルシェとで、出店内容がかぶっていることが多いと思う。それらと比べて、どのように特色を出すか、個性化するかが課題になるのではないかな。

B委員

実は差別化しようとは思ってなくて、コラボ化していこうと思っている。条例の中にも書かれているが、アート×〇〇をたくさん作っていこうとしている。この〇〇には、農業、福祉、教育等いろいろなものが入ってくる。既存のイベントにアートの要素を組み入れる。音楽に絞っているところもあれば、ワークショップを取り入れているところもあるが、何か既存のイベント×アートで広げていきたいということを今年はかなり意識して取り組んだ。

今後も掛け算を増やしていったって、相乗効果を狙っていきたい。それが結果的にはすそ野を広げ、アートに触れる機会や参加する機会を増やしていったって、来られた方が自分たちの世界を広げていくことにつながればいいなと思う。

課題としては、今年、高安さんがダンサー・イン・レジデンス八尾という企画でTOMO I R&Dさんと一緒にやっていただいたり、平井製作所さんと一緒にやっていただいたりしたが、アート×産業をどう広めていくのかということと、あまりまだ進められていないアート×教育をどう進めていくかが課題だと思う。高校生はやり始めているが、それもなかなか課題がいっぱいあって、本来、条例上で書かれているアート×教育というのは、中学生や小学生、幼稚園児といった方たちをどうアートの世界に巻き込んでいくのか。

アート×福祉の部分も含め、やるべきことはたくさんあるが、2028 年に向けて、一つ一つ階段を上っていければいいなと思う。

今もマンパワー的にはいっぱいいるので、組織の再構築を図る中で解消できたらいいなと思う。

A委員

ほかの地方では、社会との共生というか、地方だと高齢者が多いところもあるし、そういう人たちが外に出ていける環境づくりが、八尾市として今後必要になってくると感じた。

先日、身寄りのない方が団地で亡くなっていた。近隣との接合性が希薄になりつつあると感じた。若く、体が動く方は積極的にまちの中に出ていけるが、体力も心配になったり、気持ちがいまいちの方はどうしても外に出かけることができずに引っ込み思案になってしまう。

障がいの有無に関わらず、高齢になっても、どんな立場でも、安心して自由に出ていける環境づくりについて、アートは力強さや推進力がある。そういうものがテーマづくりになってくれたら、今まで関わりのなかった人たちとの接点、世代間の接点を広げていき、交流を図れるきっかけを作ることが、アートを展開し、運用することの醍醐味だと思う。今後もどんどんイベントを開催し、共催等をしていくことによって、関わりを増やしていけるような仕組みが必要だと思う。

B委員

一つの例として、茶吉庵ではカルチャークラブがあり、合唱の練習会を毎月1回やっているグループがある。地元のおばあさんで、最初はお嫁さんの介助が必要だった方が、練習会に参加し、声を出すようになってから、表情が豊かになり、最近は介助なしで来ることができるようになり、みるみる元気になっていった。音楽の力がおばあさんの生きる力になっていき、練習会に来ることがすごく楽しみだと言っている。メンバーの中でも一番早く来るようになり、茶吉庵が開く前から来るぐらい意欲的になっていて、今まで接点がなく、家にこもっていたのに、「昔歌っていたから、こういう機会があったら歌ってみたいと思っていた。」とおっしゃって、元気になっていったことがすごく印象的で、こういったことが八尾市内各地で繰り広げられるようになれば素晴らしい。もっといろんなアプローチの仕方があると思うので、やっていけばいいだろうと思う。

D委員

すごく活発な議論で、刺激を受けて聞いていた。藤野会長が最初におっしゃった、今後これをどういう風にしていくのか、という中で、自生的、つまりボトムアップでリーダーがそれぞれやりたいことを主体的にやっていき、それが広がっていくというやり方と、ある程度コントロールして目的に向かっていくというやり方と、うえるかむコモンズとして今後どういう方向に進んでいくのかという点は、私もそこがとても気になるところだ。

いろんな論点があるが、A委員がおっしゃった社会包摂や共生社会の実現というところも絶対必要だが、一度に全部やってしまうと手が回らなくなるし、たくさんめざしすぎて、結局コモンズとして何をやっているのかがわからなくなる。

今後、ある程度の守備範囲や役割分担を決めながら、例えば、B委員がおっしゃった2028年度の国際芸術祭をめざすとなれば、それを一つの節目として目的を設定し、そこはある程度計画化しながら、みんなでやっていくというやり方で、達成してみるのがいいのではないか。その中で、自生の部分とコントロールする部分について、守備範囲を整理していくと、皆さんやりやすいのではないか。

去年、今年のうえるかむコモンズの活動を見ている中で、それはすごいことで、これだけよくやられたなと思うが、ずっとこの調子のままでは続かないのではないかと危惧している。

八尾まちかど国際芸術祭をどんな形でするのか議論をしていって、ある程度の範囲を定めたほうが良い。そしてその次の段階に入ればまた新たな目標を掲げればよい。

社会包摂事業や共生社会事業をやろうとすると、私たちもプリズムホールで一部実施しているが、それをめざした準備や設えや関わってくれる共通理解のできるアーティストを探すなど、やることが多い。こういった様々な事柄の調整が自発的に進んでいけば言うことはないが、中々そうはならない。

そういった調整を図るやり方もあれば、もっと自生的に自分たちがこれをやりたいんだというものを出していってやっていくやり方と分けたいと思う。自生的なやり方の時は、来年、再来年くらい続けてみて、そのうち企画が増えてくればピアレビュー、つまりお互いの企画を横のつながりで意見を言い合うプレゼンの仕組みが必要で、プレゼンをしてたたき上げていくという方法もとれる。いくつかの枠の範囲で行い、それ以上の企画は課題を検討し、次年度に実施するというようなことを仕組化するといいのではないか。目標とそれに向かう計画と企画を精査して、全部の企画を実施することはどこかのタイミングであきらめていったほうがいいのかもしいかなと思った。このまま企画数が膨らむと、今の対応方法ではネットワークの維持が困難となるのではないかという心配をする。

会 長

社会的包摂という概念について、私も今アートのケアに取り組んでいて、医療文化経済グローバル研究所を作った。今は一般財団法人だが、もうすぐ公益財団法人になる予定だ。養父市が出資して作った。病院と薬に頼るよりもアートの力、スポーツも含めて文化の力を活用したほうが、お金もかからないし、本人たちは健康長寿を維持できるという一つのコンセプトに基づいて取り組んでいる。

今、行政に依存している部分があって、私たちとしては最終的には行政に依存しなくてもやっていける形をめざしている。ただし、行政の中でも、昔、「行政の文化化」と言われたことだが、縦割りではなく、文化を軸にして横串を刺すやり方が今後重要になる。

私がいる但馬地方は超少子高齢化で、2050年には人口が半分になると言われている。こんなところでは縦割りだったら何もできない。なので、行政側が横串の視点で再構築していく。その時に、文化を切り捨てるのではなく、文化を軸に健康長寿、ウェルビーイングを実現できるはずだという一つの見通し、展望を持たないと、文化そのものを排除されてしまう。文化をうまく生かして地域が維持できるような仕組みを作らないといけない。

行政の側も、せっかくだけ展開しているコモنزの動きを活用する形で再編成できれば、全体として持続可能な形を作れるのではないかな。

A委員

八尾市にある文化資源の活用は、まだまだ不十分だと思う。高安能を見たときに気づいたのだが、八尾市は思っている以上に広い地域なので、八尾市で育った人でも知らない場所や歴史や文化が多い気がする。うえるかむコモنزのイベントに参加する中で、その場所にある気づきを大切にしようという方向に持っていくことが大事で、市内にある歴史や文化についていろんな人から語られたり、聴き取りすることでやりたいことが明確になっていき、2028年の目的なり目標の具体性が鮮明になってくるのではないかな。

市内で行われているイベントに参加したいけど、どんな参加を望んでいるのかわからないから参加できない。積極的参加というよりも、受動的参加。八尾のこと（歴史や文化）を知らないから参加できないとか、地域（や場所）を知らないから参加できない（参加しない）ということも案外多いと思うので、うえるかむコモنزのほうから歴史・文化に関わりを持つ発信をしてもらえたら、もっといろんな人が、自分はこの部分はなんとなくでも知っているからちょっとだけでも参加してみようかなということになるのではないかな。そういう小

さな動きが波及効果を生み、多くの人々に支持されて行くのではないか。

うえるかむコモンズで行ってきた活動がはっきりとした実績として明確になってきたのだから、イベントや企画を増やすことと育てることを両輪でやっていけるように、審議会で議論を重ねる中で、ここをこう変更することで、より効果が期待できるとか、この部分は、見直す必要があるなど、より良い方向へ進むために、様々な角度から検討してみようという議論は必要ではないかと思う。

会 長

そういう議論をこの場でもできるし、推進会議の幹事会でもやっていけばいいと思う。来年4月からは、私ももう少し八尾に関われるようになると思う。今後は、青臭いことも議論していければと思う。

(3) 事業視察について

資料5に基づき、高校合同文化祭、まちかどライブクリエーションへの事業視察をお願いした。

A委員

きんやおマルシェに行ったが、職員さんはいなかった。駅の噴水広場で行われたイベントは、イベント目的の人もいれば、通りすがりの人もいるので、スタッフさんの運営の苦労を感じた。丁度、新田ゼラチンのエシカルフェスタと重なっていたので、マンパワー的に大変だなと感じていたが、イベントに来場している方が困った時にスタッフに質問をしようとしても誰がスタッフか認識できないので、スタッフだという認識できるようなもの（例えば）腕章は必要だ。

ちょうどいい気候だったので、多くの人が外出していたようで、リノアスやアリオにも家族連れなども多く来店していたようだし、様々な場所に人の流れが分散し、特定の場所にお客さんが集まりにくくなる状況は仕方がないことだと感じた。

B委員

ふうりん劇場は、プロ同士がぶつかってちゃんと作り上げた楽しいアートという感じがすごかった。TOMO I R&Dの友井さんが、大人が本気で楽しまなければ子どもたちは楽しめない、芸術やダンスというものを大人が本気で楽しんでいるところを子どもに見せることが必要だというようなことをおっしゃっていたのが印象的だった。

E委員

ふうりん劇場は、実は外部資金を取ってプロジェクトを進めていた。芳泉文化財団の地域活性化部門の助成金を得たダンサー・イン・レジデンス八尾という別のプロジェクトがあり、「町工場をテーマにパフォーマンス作品を作ってほしい」という依頼を受けていたので、まちかどライブクリエーションとコラボする形で作った。企画はこちらで全部まとめ、人のネットワークをつないでいただく部分をコモンズの方たちをお願いした。

ただ、それを今年一年で終わらせるのではなく、2028年に向けてつながりを作るための実証実験をやろうと思い、プロジェクトを3つ進めた。一つはモバイルシアターを作った。これは、展開型で自由に持ち運びができる小さな劇場だ。子どもたちへの絵本の読み聞かせや人形芝居をされている方たちが、どこでもそれを持って行けば、子どもたちにお芝居を見てもらえる。事務局には苦勞を掛けたが、まちなかに劇場を持って行くことをしたくて、警察への許可も取っていただくことができた。来年も、再来年も、モバイルシアターは

まちかどライブクリエイションの様々な会場で活用してもらえと思う。

次に、滞在制作ができるかどうかを調査した。やおうえるかむコモンズ推進会議のメンバーでもある株式会社N I C Oコーポレーションに協力いただき、ギャラリーN I C Oという近鉄八尾駅とJ R八尾駅のちょうど中間あたりの、日本家屋を改修した民泊施設に1週間ほど滞在した。ここはアーティストが5、6人は宿泊できるし、英語、中国語、韓国語表記があり、海外からアーティストが来た時には滞在してもらえと思う。

また、地域コーディネーターがいるのかどうかを調査したが、もちろん事務局の市の方と、萩原さんはじめ、コモンズの皆さんも協力してくださったが、産業とつながるには足りないところがあり、その部分はプリズムホールの大久保館長にご相談し、八尾市の観光協会さんが今回の企画趣旨に沿った企業を紹介してくれた。これは来年も何かつながっていくんじゃないかなと思う。

国際芸術祭をやるとなると、よそからアーティストを呼ぶだろうという想定があるので、民泊施設の方がコモンズの推進会議のメンバーでもあるということはすごくいいことだ。

今回は、芳泉文化財団の地域活性化部門の助成金を取っていたので、企画はこちらで全部まとめ、人のネットワークをつないでいただく部分をコモンズの方たちをお願いした。

A委員

滞在ができるとなれば、チャレンジしたい人は多いと思う。今回の形が一つのモデルになると、ほかの方も入りやすいと思う。窓口がないからどうしようという方が多い。

E委員

ここはお願いして、ここは自分でやるというような、すみわけがしっかりできれば、相談しながら進めていけると思う。

B委員

高安さんの企画は突出した素晴らしい企画だったが、ナイトマーケットwith芸術文化音楽祭というのは、もともとエシカルフェスタをやっておられるイベントとコラボさせてもらっているし、ダンサー・イン・レジデンス八尾は高安さんが別で進めておられる企画とのコラボだし、ひらいマルシェも、もともとひらいマルシェをされていたところに、今回、やおうえるかむコモンズがコラボさせていただいた。きんやおマルシェは去年のまちかどライブクリエイションの打ち上げで音楽部会が立ち上がり、音楽部会を中心に動いていたいて実施している。というふうに、いろんなところとコラボして企画していただいたものがたくさんある。それを今後、どう発展させていくのか、大きな課題だ。

自分たちだけでこれ以上パイを増やすのは厳しいので、色々な方がやっておられることにアートの要素を入れて広めていくことも一つだ。既存のイベントや自発的に動いてくださったものとのコラボは積極的に進めていければと思っている。予算の限り、人材の限りは非常に大きな問題になっているので、これをどう解決するか、なんとか乗り越えていきたい。

会 長

今年なされたコラボ型のスタイルは一つの大きな可能性だと思っている。別府プロジェクトのプラットフォームを作って、あとは自主的にやってくださいというのも一つの形だが、コラボ型は八尾市の特徴で、行政が関わっているにもかかわらず、行政が関わっているからむしろできるのかもしれないが、すごく面白い動きだと思う。

B委員

八尾にはイベントをやっておられる方がものすごくたくさんいらっしゃる。そことコラボすることにより、点から線へ、線から面へというものの一つの具現化の形なのかなと思う。

同時に、幹となるところは自分たちで作っていかないといけない。2028 年に向けて、また、万博に向けて、幹は自分たちでしっかり作って、枝葉の部分はコラボ型にすることにより、広がりを見せられるのかなと思う。まだまだ課題はいっぱいあるが、一つずつクリアしていければと思っている。

(4) その他

①推進会議の再構築について

B 委員

去年よりも今年は推進会議のメンバーも増え、増えたメンバーは、実はもうすでにイベントをやっておられる方に積極的にお声がけをしてメンバーに入っていた。

去年はワーキング部会を立ち上げ、また、幹事会で色々話し合っってイベントをやっていきましょうという形だったが、今年は各会場のリーダーが積極的に動いて進んできた。そこで、幹事とリーダーの差異が生まれてきた。これが大きな課題だったので、来年度は幹事会を再構築し、具体的に言うと、リーダーに幹事になってもらいたい。

また、アートコーディネーター養成講座の中で学んだこととして、「参画のはしご」というものがあり、推進会議のメンバーに、プロジェクトにどれくらい関われるのかを示していただき、プロジェクトにしっかり関わっていきたいという意思表示をした人に幹事になってもらって、幹事会で話し合っって決めていきたい。

また、八尾市には人形浄瑠璃文楽の人形遣いで、人間国宝の吉田玉男さんがいらっしゃる。吉田玉男さんも、うえるかむコモンズの活動に協力するよと言ってくださっているの、何らかの形で関わっっていただきたいと思っている。藤野会長と吉田玉男さんのお二人を頭にして、实际的に動くのは幹事会であり、推進会議で中身をさらにもんでいくという組織に作り替えようと考えている。先日、推進会議でもこの話はしており、皆さんのご理解をいただいている。

また、組織が単年度で終わるのではなく、ずっと続いていくような組織運営の在り方についても考えていきたい。

会 長

規約を作ることは私も賛成だ。規約の有効性を担保するため、審議会で審議は必要ないかもしれないが、報告は必要ではないか。そうすると、タイミングとして、審議会は年 2 回しか開かれないので、間に合うかどうか気になる。

B 委員

新体制は、できれば来年 4 月からスタートさせたいので、それまでに規約は作っておきたいと思っている。昨年度は、審議会在 3 月末に開催されていたので、それまでに規約を作っておきたい。すでに規約づくりについても動き始めており、実効性のある規約を作りたい。

②令和 6 年度八尾市文化会館事業について

大久保委員から、配布資料（ピックアップ！プリズム等のチラシ）に沿って、今後の事業について説明いただいた。

会 長

本日の案件は以上だが、委員の皆さんの感想等をお聞かせ願いたい。

F 委員

教育現場から今日は参加させていただいて、教育とアートということで、今後どんなふう
にコラボができるかと考えながら聞いていた。子どもたちを育てる立場から言えば、子ども
たちがどんなふうにあートを取り入れていくのかをしっかりと考えていただいていることが
わかり、こんな風に八尾の子どもたちを育てるところにつながっていくのかと感じた。

G委員

八尾の中で、文化や芸術に触れる機会をこんなにたくさん作っていただいているという
ことが本当にありがたいと感じた。小学生は校区外に自分たちだけで行くことはできない
のだが、こうしてチラシ等をいただくことでおうちの人と一緒に行かせていただいて、触れ
る機会があるのはすごくありがたい。教育とコラボしていくことについて、どんなことが学
校のほうでもできるのか、考えていかないといけないと思う。

副会長

とても発展的に色々なプログラムが増え、自走するプレイヤーとしての委員やメンバー
が増えられたことは成果だと思い、大変興味深く聞いていた。今後これをどんな風に継続し
ていくか、発展させていくかが課題だと思うが、まずはひとまずやってみて、そこで認知さ
れてということが大事になってくる。

一方で、ポータルサイトを立ち上げたと思うが、まったく機能していないように思われる。
せっかくこれだけ活動していても、ポータルサイトに全然載っておらず、八尾市のホームペ
ージにしか情報が載っていない。では、あのポータルサイトは何なのか。ポータルサイトを
作るときに言ったと思うが、ポータルサイトは更新しないとまったく意味がない。

義務として、イベントを実施する人には記事を上げてもらうようにするとか、やっている
サイクルを見える化することと、関わっている人しかわからないということではなく、プロ
ジェクトとしては蓄積されるもの、あるいはパブリックに、ここに来ない人でも知りうる
ということがユニバーサルデザインの観点から必要だ。

なぜポータルサイトを作ったのか、もはや謎でしかないというところが運用としてはよ
くないところだ。やった人の満足度だけは高いけれども、結局消費されるイベントを作っ
ているだけになってしまう。2025年ないし2028年につながる蓄積を、これから振り返るこ
とができない。そこはちょっともったいないと思う。まだ走り出したばかりだが、そこを
読み込んでポータルサイトを作られていると思うので、想定しながら進められたほうが
いいと思う。

A委員

システムはワードプレス（という文章を管理するシステム）を使っていると思うが、投稿
ページは持っているのか、いったん停止しているのか。

事務局

投稿ページは持っているが、皆さんが触れることができる状態にはなっていない。

A委員

そのマンパワーが足りていないところがボトルネックなのだろう。それが展開できる
ようになれば、SNSにも広げられるし、その操作が手軽にできるのであれば、パブリック
なものなので、セキュリティをかけないといけないとは思いますが、だれでも閲覧できるよ
うになると思う。

副会長

権限が事務局にあるのであれば、フォーマットだけ作っておいて、内容を書くのは先方で、
最後の上げるところだけを事務局がやるなどのルーティンを作らないと、せっかく作っ

いるのに、まったくやっていないかのようなサイトになっている。みんなが知らないというのがとてももったいない。いくつか方策はあると思う。継続したい目標があるとするならば、ポータルサイトを作ったことで満足することはよくない。

4. 閉 会